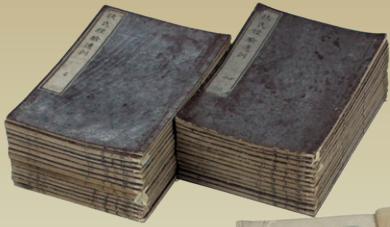


シリーズ生誕200年記念
～その伍



緒方洪庵『扶氏経験遺訓』
安政4年(1857)～文久元年(1861)
大阪大学適塾記念センター



緒方洪庵肖像
安政6年(1859)
大阪大学適塾記念センター



津下精齋

津下精齋肖像
津下健哉『岡山の蘭学者 島村鼎甫
と石井信義—幕末・明治初年の日本
医学を支えた蘭医たち—』
(吉備人出版、2016年)より



伊東貫齋

伊東貫齋肖像
伊藤榮『伊東玄朴伝』
(玄文社、1916年)より



久保良平

久保良平72歳肖像
久保医院提供



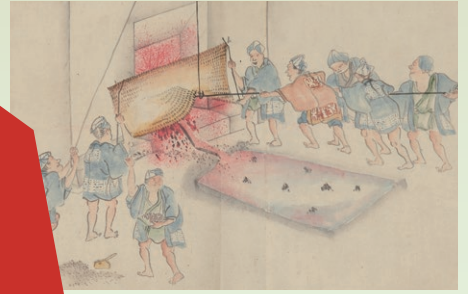
久保医院(宇陀市)外観写真

梅谷謙堂 井坂玄琳
久保良平 三瀬白圭

八人の医師たち

伊東貫齋 津下精齋
江馬信成 群馬良三

日本近代製鉄の父
大島高任



出鉄の図
岩手県指定文化財「紙本両鎮山御山内並高炉之図」より
釜石市提供



橋野高炉跡
日本現存最古の高炉跡
釜石市提供



大島高任

大島高任肖像
明治5年(1872)岩倉使節団随行中に
ロンドンにて撮影したものと
釜石市提供

2026年は、日本近代製鉄の父・大島高任(1826-1901)をはじめとする9名の適塾門下生が生誕200年を迎えます。

高任は安政4年(1857)に盛岡藩の甲子村大橋(現釜石市)に高炉を建設し、日本で初めて鉄鉱石製錬による出鉄操業を成功させました。鉱業の近代化に尽力する一方で、私塾・日新堂の設立や工学寮(現東京大学工学部)の創設など、新時代の人材育成にも取り組みました。

織田(伊東)貫齋(1893没)は、蘭方医・伊東玄朴(1801-71)の養子となり、幕府奥医師に任命され、米国使節ハリスの重患を治療しました。大垣藩医の江馬信成(1874没)は、師・緒方洪庵の大著『扶氏経験遺訓』を用いて門人の医学教育に携わり、大坂で開業医となった梅谷謙堂(1874没)は師と同じくコレラの大流行に対峙しました。宇陀松山の医師・久保良平(1897没)は、洪庵の種痘事業の一翼を担い、大和国への種痘普及に努めました。このほか、岡山県病院に参画した津下精齋(1899没)、利根郡医・群馬良三(1898没)など、全国各地で地域医療に貢献をなした多彩な人物がいます。

近代国家を支える技術革新、次世代の人材育成、感染症対策、地域医療の発展など、多方面において日本近代化の礎を築いた生誕200年の適塾門下生の事績に迫ります。

令和8年(2026)

5.26(火) - 6.7(日)

会場 適塾 (史跡・重要文化財)
開館時間: 10時~16時
541-0041 大阪市中央区北浜3-3-8

一般 400円(300円)、学生 200円(100円)
※()は団体料金(20名以上)。要事前申し込み。詳細はホームページ参照
※学生は、大学生、高校生又はこれらに準ずる。
小学生・中学生 無料 ※中学生以下の方は引率者が必要
大阪大学の学生 無料 ※要学生証提示

展示解説 5月31日(日)・6月7日(日)
両日とも11:00~11:30
※定員15名/申し込み不要、先着順。
担当: 西川哲矢(大阪大学適塾記念センター特任助教)

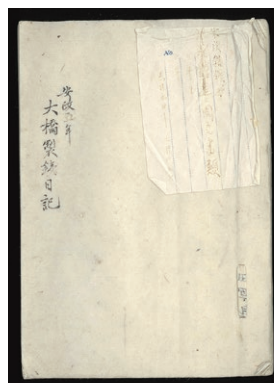


令和8年度 適塾特別展示 シリーズ生誕200年記念～その伍 日本近代製鉄の父・大島高任と八人の医師たち

日本最古の高炉操業記録

「大橋製鉄日記」

砂鉄ではなく鉄鉱石を原料とした鉄が必要だと確信した大島高任は、良質の鉄鉱石が採れる甲子村大橋に西洋技術をもって高炉を建設し、安政4年12月1日(1858年1月15日)、操業に成功しました。安政5年に大島高任によって記されたこの日記は、日本最古の高炉操業記録とされています。鉱石比、木炭比、コークス比などをいろいろと変化させて試行錯誤した克明な記述があり、高任の苦勞がうかがえます。

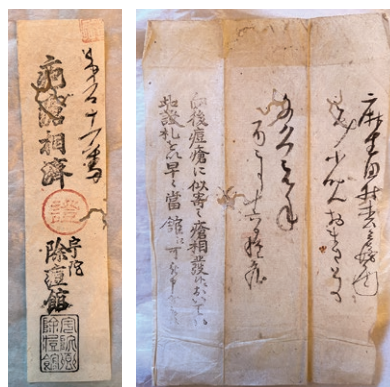


「大橋製鉄日記」
大島高任
安政5年(1858)
釜石市所蔵

師の種痘事業の一翼を担う

「疱瘡済証」

久保良平は、大坂除痘館から分苗を受け、宇陀を拠点として大和国の種痘伝播に尽力しました。自らの医院を宇陀除痘館としたと考えられ、地域の人々に種痘を施し、被接種者には「疱瘡済証」(種痘済証)が発給されました。済証の包紙には、被接種者の名前・年齢・接種日が書かれ、「今後痘瘡に似た症状が出れば、この証札をもって早く当館に申し出るように」と、大坂除痘館での様式に倣って作られたことが分かります。

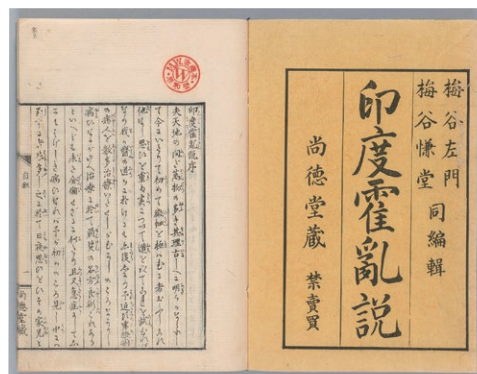


「疱瘡済証(包紙付)」
宇陀除痘館
文久2年(1862)
久保医院所蔵

兄弟でコレラに立ち向かう

『印度霍乱説』

安政5年(1858)、日本を襲うコレラ流行に、緒方洪庵が『虎狼痢治準』を緊急出版し治療指針を示したことはよく知られています。梅谷慊堂も、同じく医師であった兄左門と共にコレラ治療書『印度霍乱説』を上梓しました。治療の経験に基づく薬術と治療法が示され、「医者や患者が工夫をめぐらせれば、九死に一生を得ることもあるだろう」「その他の急病にも裨益するところがあるのではないかと述べています。一般への理解を目指した執筆態度は、師洪庵の教えによるものでしょうか。

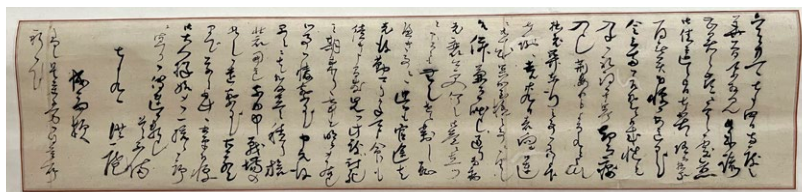


『印度霍乱説』 梅谷左門・梅谷慊堂著 安政5年(1858)
大阪大学適塾記念センター所蔵

自らの覚悟を弟子に伝える

「津下精齋宛緒方洪庵書状」

津下精齋が洪庵の幕府奥医師招請につき尋ねたこと、また金三両を受け取ったことへ返答したもの。洪庵は、多病老衰の身であって、いまさら幕府の何の役にも立たず、世間に対しても恥ずべきことであると述べています。江戸行きの準備に慌ただしい近況を報告する一方、「討ち死の期、来たり」と翌年の死を予感し、覚悟した心境が綴られています。洪庵の思いがよくあらわれた書状であり、師弟の交わりの深さもまた知り得るものです。



津下成(精)齋宛緒方洪庵書状 緒方洪庵 文久2年(1862) 大阪大学適塾記念センター所蔵